

森 山 新

(お茶の水女子大学)

morishin@cc.ocha.ac.jp

1. はじめに

格助詞二は(1)~(10)のように、授与や動作の相手を表す用法、何らかの移動の着点を表す用法、授与や動作の主体を表す用法、原因を表す用法、位置や時間を表す用法、所有や知覚などの主体を表す用法など、多くの意味用法を有している。

- (1) 友だちに本をあげる。(授与の相手)
- (2) 学生に日本語を教える。(動作の相手)
- (3) 机の上に本を載せる。(移動の着点)
- (4) 友だちに本をもらう。(授与の主体)
- (5) 先生に日本語を教わる。(動作の主体)
- (6) 台風にかを飛ばされる。(原因)
- (7) 机の上に本がある。(位置)
- (8) 10時に家を出る。(時間)
- (9) 私に子供がある。(所有の主体)
- (10) 私には富士山が見える。(知覚の主体)

詳しくは次章に譲るが、認知言語学の観点からの先行研究を見ると「着点」を共通の意義素としたり、プロトタイプと考えたりするものがほとんどで、「着点」のみに関心が向けられている傾向が強い。しかし移動の方向性という点に注目して上の二の意味用法を見直してみると、(1)~(3)のように移動の「着点」を表すものだけでなく、(4)~(6)のように「起点」を表すもの、さらには(7)~(10)のように移動が認めにくいものなどが存在していることがわかる。また移動が認めにくいものの中には、(7)、(8)のように空間的位置や時間的位置など、何らかの位置を表すもののほかに、(9)、(10)のように所有、知覚など、何らかの経験の主体を表すものなどが存在する。したがって本稿では格助詞二の意味用法全体を無理に「着点」によりひとくくりにするのではなく、森山(2004b)の考察をも踏まえ、移動の着点、移動の起点、存在の位置関係、経験の主体という4つのカテゴリーに大別し、その意味構造を分析していく。

認知言語学的な観点からすれば、多義語の様々な意味用法は、プロトタイプを中心として、あるスキーマを共有しつつ一つのカテゴリーを形成していると考えられる。多義語の様々な意味用法は、何らかの動機づけに基づいてプロトタイプからの拡張によって生じたものであると考えられることができる。では二の意味構造では何がプロトタイプで、どのようなスキーマを共有しているのだろうか。本稿では格助詞二について、このような意味構造を明らかにすることを目的としている。

2. 先行研究

二格の意味・用法に関する研究は多いが、このうち認知言語学的観点から多義語としての意味構造に触れたものは、国広(1986)、堀川(1988)、杉村(2002)、菅井(2000, 2001)、森山(2001a, 2001b, 2003, 2004b)などがある。

国広(1986)では、二に「密着の対象を示す」という意義素を仮定している。ここで二は「一方向性を持った動き」と、「その動きの結果密着する対象物あるいは目的」とで表される全体を表しているとしている。しかし現代語の二の「人になぐられる」、「人に教えてもらう」などの表現では、別の意義素を認めざるをえないことも語っている。

堀川(1988)では、二の意義素を「着点性」のものに限定する立場をとっている。(11)~(14)のように二が「起点」的な意味を有する場合もあるが、その場合にも、二は「密着の対象を表わす」がゆえに、「着点」の意味を共有するとしている。さらに杉村(2002)はこの堀川(1988)の立場をふまえても立場をやや異にし、「着点」がプロトタイプ的な意味であるとしている。

- (11) 太郎は次郎に殴られた。
- (12) 太郎は花子にプレゼントをもらった。
- (13) 太郎は花子に部屋を掃除してもらった。
- (14) 太郎は持病に苦しんでいる。

ここで「密着」とは何かというと、(11)～(14)においてガ格は能動性が低く(受動性が高く)自らだけでは動作が成立しないことから、動作を引き起こすもの(二格)に「密着しなければ動作が成立しないという」性質をさしているという。

しかしここで何ゆえ、「能動性が低く(受動性が高く)自らだけでは動作が成立しない」というガ格の性質をあえて「密着」という用語を用いて表現したのであるか。それは二格の「起点」用法の場合にも、ガ格が「二格に対する密着性」を持っていることを示し、二格の用法すべてに「着点」としての共通の意義素を見出そうとしたためである。しかし後で詳しく述べるが、二格に対するガ格の「密着性」は「受動的な密着性」であると考えたほうが自然である。だとすれば、ガ格はやはり「着点」であり、それに対峙する二格は、「起点」となってしまう。

菅井(2000, 2001)でも、移動の点では着点の用法がプロトタイプであり、起点の用法は着点の用法からの拡張であるという立場をとっている。着点用法がプロトタイプである根拠として、例えば「花子が先輩に携帯電話を借りた。」のような文で、借りる前に先輩への花子の働きかけが先行しているように、起点用法の場合も「ガ格 二格」の働きかけが前提になっていることが述べられている。

森山(2001a, 2001b)では、Langackerの研究を参考にしつつ、二格はプロトタイプとして能動的参与者(経験主)すなわち人(有情物)であり、ガ格と二格との間にモノの移動があるが、その方向は基本的にガ格から二格であるとしている。また森山(2003)では二格すべての用法が共有するスキーマに「着点」といったものを考える限界を認めて、「ガ格 二格」を二格の用法すべてが共有する「スキーマ」と考えることはできず、「着点」という意味は単に「移動の方向性」の「プロトタイプ」と考えるべきであると述べている。そして二格用法のプロトタイプは「彼に手紙を送る」のような与格の用法であり、二格の用法すべてが共有するスキーマは「ガ格に対する対峙性(独立性)」であるとしている。

以上の先行研究では、二の様々な用法は、「着点」としての意味を何らかの形で共有しているとしているか、もしくは共有はしていないものの、プロトタイプであるとしている。

しかしながら森山(2004b)は、これらとは立場を異にし、格助詞二の様々な意味用法が「着点」としての意味を共有しているとか、プロトタイプであるとは考えず、移動の着点、移動の起点、存在の位置関係、経験の主体という4つの意味用法があること、そして4つのカテゴリーは4通りの認知主体の把握の仕方と関係しているとしている。

それによれば、認知主体である人間は、外界を認知するにあたって、事態をプロセスとして動的に把握するか(プロセス的把握)、または存在として静的に把握するか(存在論的把握)のいずれかを選択している。これら「プロセス的把握」、「存在論的把握」の双方に、認知主体の見え(perspective)との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「移動の起点」、「経験の主体」の用法では、それぞれ「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法に比べ、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」となっている。以上をまとめたのが表1である。

本稿ではこの立場を踏襲し、格助詞二の意味用法を4つに大別した上で、各々の多義構造についてさらに分析を加え、最終的に二の多義構造が全体としてどのようになっているのか考察することにする。

表1 2通りの把握と二格の意味との関係

	プロセス的把握	存在論的把握
客観的把握	移動の着点 (プロセス的事態)	存在の位置関係 (存在論的事態)
主観的把握	移動の起点 (プロセス的事態)	経験の主体 (プロセス的事態)

3. 格に対する認知言語学的観点

分析を始めるにあたりまず、言語化に際して格の決定がどのようになされるかについての認知言語学的な考えを整理してみたい。Langacker(1991a, 1991b)によれば、認知主体として人間は、自らを取り巻く外的世界を様々なモノと関係のネットワークで構成されていると見る¹。しかし人間は普通、その中の1つの動力連鎖(action chain)に関心を向け、その一部を切り取り(scope) 叙述の対象とし、それをベース(base)として2つのモノ(参与者)とその関係をプロファイル(profile)する。

続いてこれが言語化される際には、普通(無標の場合)はプロファイルした動力連鎖の最上流の参与

者が最大の際立ち (tr : trajector) を持って認知され、言語化にあたっては主格で表され主語 (S) となる。また動力連鎖の最下流の参加者が第二の際立ち (lm : landmark) を持って認知され、言語化の際には対格で表され目的語 (O) となるとしている。

また他動的な動力連鎖の原型的な参加者役割には、「動作主 (AG)」、「道具 (INSTR)」、「主題 (TH)」（被動作主 (PAT) 移動者 (MVR) など）、「経験者 (EXPER)」などがあるが、これらはそれぞれ「源泉領域の能動的参加者」、「源泉領域の受動的参加者」、「目標領域の受動的参加者」、「目標領域の能動的参加者」と特徴づけることができる。それらは言語化に際して (プロトタイプの場合) 各々、主格、具格、対格、与格で表されるとしている (Langacker 1991a : 327)。

4. 分析

日本語の格助詞二は与格にとどまらず、幅広い意味の広がりを持つ。本章ではこのような二の意味用法を森山 (2004b) の4つに分類し、この順で分析を進めていきたい。Langacker のモデルでは、事態がプロセス的に把握されている。そのため、「移動の着点」や「移動の起点」用法では、このモデルが踏襲できる可能性があるが、「存在の位置関係」や「経験の主体」の用法では、事態が存在論的に把握されているため、このモデルをそのまま適用することはできず、新たなモデルを考える必要がある。

4-1 格助詞二の4つの意味用法

4-1-1 プロセス的把握の用法

4-1-1-1 移動の着点

まずプロセス的把握の用法で注目しなければならないことは、与格が「目標領域の能動的参加者」を表すとしている点である。これは「源泉領域の能動的参加者」を表す主格との関係において、与格としての二格が以下のような性質を持つことにつながる。

着点性：「源泉領域」に属する参加者に対して「目標領域」に属する参加者が持つ着点としての性質

対峙性：主格で表された「源泉領域の能動的参加者」同様、「能動的な参加者」として、「源泉領域の能動的参加者」に対しても従属せず、主体性を持って対峙する性質 (これを本稿では「対峙性」と呼ぶ)

なお「対峙性」は同じ「目標領域の参加者」を表すヲ格と比較するとより明らかになる。ヲ格は二格が目標領域の「能動的参加者」を表すのに対して「受動的参加者」を表し、「源泉領域の能動的参加者」を表す主格との関係において以下のような性質を持つ。

着点性：「源泉領域」に属する参加者に対して「目標領域」に属する参加者が持つ着点としての性質

従属性：「受動的な参加者」として、「源泉領域の能動的参加者」に対して持つ従属的な性質

このように二格 (与格) はガ格 (主格) に対し「着点性」と「対峙性」を持つのに対し、ヲ格 (対格) は「着点性」と「従属性」を持つ。すなわち二格とヲ格とは「着点性」を共有するが、ガ格に対して「対峙性」を持つか「従属性」を持つかの点では性質を異にしている。

具体的な例を挙げれば、(15)のように、一般に使役文ではヲ格を用いると強制的意味が強くなり、二格を用いると自主性の意味が強調されると言われている (Langacker 1991a : 411) が、ヲ格はガ格を起点とした動力の影響下に置かれ、従属的である一方、二格はその動力の影響下には置かれておらず、主体的であるといった、ガ格の動力の影響との関係で説明が可能である。また(16)で遠くに対峙する「山 (頂)」は二格、既に足元にある「斜面」はヲ格で示されること、(17)で一般に「乗る」対象として対峙する乗り物は二格で表されるが、より乗り手 (ガ格) の力の支配下に置かれた「乗り回す」のような場合には、ヲ格で示されるようになることなども、同じようにガ格の動力の影響との関係で説明が可能である。

さらに(18-c)で「学生」が二格、「英語」がヲ格で表されるようになるのも、「英語」は「教える」という動力連鎖の直接的な支配を受け、「従属的」であるのに対し、「学生」は「英語」に比べ、「主体性」を持ち、動力連鎖の直接的支配を受けていないためと説明できる。

(15) a. 子供を働かせる。 b. 子供に働かせる。

(16) a. 山に登る。 b. 斜面に登る。

(17) a. オートバイに乗る。 b. オートバイを乗り回す。

(18) a. 英語を教える。 b. 学生を教える。 c. 学生に英語を教える。

以上、二格の「移動の着点」の用法では、「源泉領域の能動的参加者」を表すガ格に対し、「着点性」と「対峙性」を持っていることを見た。

4-1-1-2 移動の起点

一方事態に対してプロセス的把握が行われていても、認知主体の何らかの動機づけにより、プロファイルされた動力連鎖の最上流の参与者（典型的には「動作主」）に必ずしも最大の際立ちが与えられないこともある（Langacker 1991a：330-377）。例えば受動化などにより「目標領域の参与者」に焦点が当てられ、ガ格（主格）で表される場合、日本語では「源泉領域の能動的参与者」も二格で表される。その結果日本語の二格はプロセス的事態において着点のみならず、起点を表す用法を持つことになる。起点用法の場合の二格は「源泉領域の能動的参与者」を表し、ガ格で表された「目標領域の参与者」に対し、以下のような性質を持つ。

起点性：「源泉領域」に属する参与者が「目標領域」に属する参与者に対して持つ起点としての性質
対峙性：「能動的な参与者」として、「目標領域の参与者」に対し、主体性を持って対峙する性質

(19)(20)では二格によって表わされた「源泉領域の能動的参与者（動作主）」は、ガ格で表わされた「目標領域における受動的参与者（被動作主）」に対し、動力連鎖の上流に位置し、「起点性」と「能動性」を持っている。(21)(22)のように視点の移動により受身ではなく語彙のボイスの変化が起きる場合も同様に考えられる。さらに(23)～(26)のような「原因」用法でも(19)～(22)の「動作主」としての起点用法同様、二格は「源泉領域の能動的参与者」として、ガ格に対し「起点性」と「対峙性」とを持ち合わせている。

- (19) 岡田氏は犯人に殺された。 具体的移動の起点（受動文）
- (20) 彼は国民に愛されている。 抽象的移動の起点（受動文）
- (21) 彼は友達に本をもらう。 具体的移動の起点
- (22) 先生に日本語を教わる。 抽象的移動の起点
- (23) 銃弾に死す。 原因
- (24) 台風之家を飛ばされる。 原因（受動文）
- (25) 借金に苦しんでいる。 抽象的原因
- (26) 騒音に悩まされている。 抽象的原因（受動文）

4-1-1-3 「移動の着点」用法と「移動の起点」用法

最後に「移動の着点」と「移動の起点」の用法を比べると、前者はガ格に対し「着点性」と「対峙性」を持つのに対し、後者はガ格に対し「起点性」と「対峙性」を持っている。

4-1-2 存在論的把握の用法

日本語の二格には以上述べたプロセス的用法だけでなく、さらに、存在論的事態を存在論的に把握した「存在の位置関係」用法とプロセス的事態を存在論的に把握した「経験の主体」用法をも有する幅広い意味のネットワーク構造を持っている。「存在の位置関係」と「経験の主体」用法は、事態を存在論的に把握したものであるため、Langacker の提示したプロセス的把握の場合のモデルをそのまま用いることができない。

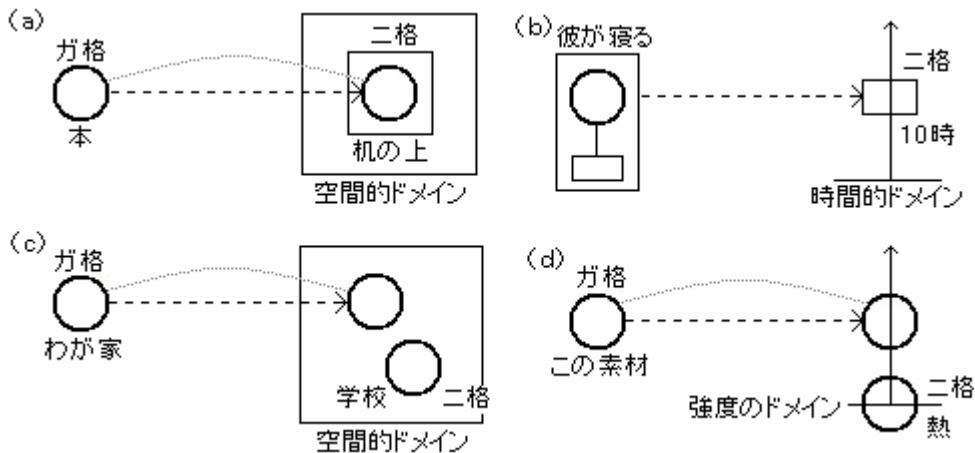
4-1-2-1 存在の位置関係

この用法はある存在とそれが存在する空間や時間などとの位置関係を示す用法で、位置づけられる存在に最大の際立ち（tr）が与えられてガ格で表され、位置づける空間や時間などのドメインは第二の際立ち（lm）が与えられて二格で表される。

例えば(27)では図1(a)のように「本」が空間的ドメインの「机の上」によって位置づけられるといった関係である。また(28)は図1(b)のように存在ではなく、「彼が寝る」という事態が、時間的ドメインの10時という点に位置づけられている。(29)では図1(c)のようにガ格（わが家）は二格（学校）によって空間的ドメインに位置づけられているが、その関係は「近い」という形容詞で表されている点が(27)とは異なる。(30)ではガ格の「この素材」は二格の「熱」をlmとして抽象的な強度のドメイン上に位置づけられている（図1(d)参照）。ここにおいて二格とガ格との関係を見てみると、両者の間には動力連鎖は存在せず、単に静的に対峙しているだけである。すなわちこれらの二格はガ格に対し「対峙性」のみを持ち、プロセス的把握の用法のように動的な「着点性」や「起点性」は有していない。但しガ格と二格で表されたものは最終的に「位置づけるモノ」と「位置づけられる場所」という関係により結びつけられているため、その意味で二格は主観的な意味で着点性を有しているとも言える。

- (27) 机の上に本がある/ない。 空間的位置
- (28) 彼は10時に寝る。 時間的位置
- (29) わが家は学校に近い。 空間的位置（遠近関係）
- (30) この素材は熱に強い 抽象的位置（強度関係）

図1 「存在の位置関係」用法のスキーマ



4-1-2-2 経験の主体

所有は(31)のように、他動詞「持つ」で表すこともできるが、自動詞「ある」で表すこともできる。前者は所有という事態を動力連鎖としてプロセス的に把握した場合、後者は同じ事態を存在論的に把握した場合である。後者の場合、所有主は二格で表示される。ここで動詞「ある」は存在の意味ではなく、所有の意味となっているが、これは「ある」が「存在の用法から所有の用法へ拡張したもの」と考えられる。所有とは自らのなわばり(ドメイン)に何かが存在していることであるから、存在の用法が所有の用法へ拡張したとは、客観的な空間における存在から、主観的な所有のドメインにおける存在へと意味が拡張したということである。

ここで注目すべきことは、(31-a)の他動詞文では「子供」は「私」に対し動力連鎖の下流にあって、その支配を受けているためヲ格で示されているが、(31-b)の自動詞文では「私」は「子供」に対して動力連鎖の上流にあり二格で表されている(図2参照)。また所有の「ある」は存在の「ある」とは異なり、(31-a)のように他動詞文で表すことができるが、これは(31-b)の「私」が「子供」に対し、客観的にはプロセス的な所有の事態における、所有主としての「能動性」や「起点性」を有しているが、それが存在論的に把握された結果、所有主の「能動性」や「起点性」といった動的側面は背景化され、存在するモノと場所という「対峙性」のみが二格に言語化されるようになったことを示している。

- (31) a. 私は子供を持っている。 b. 私に子供がある。 所有主
- (32) 私には富士山が見える。 知覚主
- (33) 姉にバイオリンが弾ける。 能力主
- (34) 私にはそのことがとてもうれしかった。 感情主

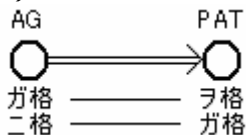


図2 所有の他動詞文の格表示

(32)の知覚主、(33)の能力主、(34)の感情主の用法も同様である。知覚とは知覚のドメインに何かが存在することであり、能力とはある能力(33)では「弾ける」能力)のドメインに何か(バイオリン)が存在すること、感情とはある感情(34)では「うれしい」感情)のドメインに何か(そのこと)が存在することであり、客観的な空間における存在から、それぞれの主観的なドメインにおける存在へと拡張した用法である(詳しくは菅井(2002)を参照)。またそれぞれ他動詞文で表すことができることから(「私は富士山を見る」、「姉はバイオリンを弾く(弾ける)」、「私はそのことをうれしかった」)、二格はガ格に対して動力連鎖の上流に位置し、「対峙性」と「起点性」を有している。但し(31)同様に経験主と経験対象との間の動力連鎖は背景化されているため、二格は「起点性」が背景化し、「対峙性」のみを有している。

4-1-2-3 「存在の位置関係」用法と「経験の主体」用法

最後に「存在の位置関係」の用法と「経験の主体」の用法とを比べると、両者はガ格に「対峙性」を持っている点で共通している。しかし前者の二格の用法はガ格に対し位置づけられる関係で結ばれ、客観的には「着点性」を有していないが、主観的には「着点性」を有している。これに対し後者の二格の

用法は本来的にはプロセス的な事態を存在論的に表したものであり、ガ格に対し潜在的に「起点性」を有している（但しこの「起点性」は上述のように存在論的把握のために背景化している）。

4-1-3 まとめ

以上、二格の4種類の意味用法について分析を行った。

「移動の着点」と「移動の起点」の用法とは、ガ格やその動力連鎖に対し動的な「対峙性」を持っている点が共通している。しかし前者は「着点性」を持つのにに対し、後者は「起点性」を持つ点が異なっている。

「存在の位置関係」と「経験の主体」の用法とは、ガ格に対して静的な「対峙性」を持っている点が共通している。しかし前者はガ格に対し主観的な「着点性」を持っているが、後者はガ格に対し潜在的な「起点性」を有している点が異なっている。

4-2 二格の放射状カテゴリー構造

次に二格の4つの意味用法が、どのような放射状カテゴリーを形成しているかについて考察する。まずはプロセス的把握の「移動の着点」、「移動の起点」用法、次に存在論的把握の「存在の位置関係」、「経験の主体」用法を論じる。

プロセス的把握とは、事態を参与者とその間の動力連鎖によって展開するプロセスとして把握したものである。従って二格は他の格助詞同様、動力連鎖に関わる参与者の一つとして機能する。ここでこのプロトタイプは、二で表される参与者や、関係する移動が如何なるものかによって特徴づけられる。

参与者：二で表される参与者としては人、モノ、場所が考えられる。さらにこれらは抽象化することがある。Langacker (1991a, 1991b)によれば、プロセス的な事態における与格は、プロトタイプとして、「目標領域における能動的な参与者」として特徴づけられる。したがって二格が表す対象のプロトタイプは、前述のように有情物である人であり、モノ、場所はそれが拡張されたものと考えることができる。

移動：人やモノや動力が具体的に移動する具体的移動をプロトタイプとして、移動が抽象的なもの、移動をメタファー的に拡張したもの、などがそれからの拡張として考えられる。

このように考えると、考えられる組み合わせは、で3通り（人、モノ、場所）、で3通り（具体的移動、抽象的移動、メタファー的移動）のカテゴリーが存在することになる。またそれぞれの移動は、他動詞で表現される場合だけでなく、自動詞で表現される場合もある。

4-2-1 移動の着点

「移動の着点」の用法には以下の9通りがある。以下の例文で は他動詞文、 は自動詞文である。

(1-a) 人への具体的移動

人に対する具体的移動を表したものである。

友だちに本をあげる。 社長に会う。

(1-b) 人への抽象的移動（移動の抽象化）

これは(1-a)の移動が抽象化したものである。

学生に日本語を教える。 母に甘える。

(1-c) 人へのメタファー的移動（移動の変化へのメタファー的写像）

「移動の着点」用法の中には、変化が移動のメタファーとしてとらえられているものがある。この場合、「変化の結果」が「移動の着点」としてとらえられ、二格で示される。

息子を一人前の大人にする。 息子が一人前の大人になる。

(1-d) モノへの具体的移動（着点のモノ化）

(1-a)では着点人がであったが、(1-d)はモノとなったものである。

携帯にストラップをつける。 醤油がこぼれて服にしみがついた。

(1-e) モノへの抽象的移動（移動の抽象化、着点のモノ化）

これは(1-d)の移動が抽象化したものである。

ゲームボーイにはまる。 政府は行政改革に取り組んでいる。 モノの抽象化

(1-f) モノへのメタファー的移動（移動の変化へのメタファー的写像）

これは変化を移動のメタファーとしてとらえたものである。

水を氷にする。 水が氷になる。

(1-g) 場所への具体的移動（着点の場所化）

(1-a)では着点が入、(1-d)では着点がモノであったが、(1-g)は場所となったものである。

机の上に本を載せる。 映画（を見）に行く。 場所の抽象化

(1-h) 場所への抽象的移動（移動の抽象化、着点の場所化）

これは(1-g)の移動が抽象化したものである。

遠くアメリカに思いを馳せる。 ようやく日本に慣れてきた。

(1-i) 場所へのメタファー的移動（移動の変化へのメタファー的写像）

これは変化を移動のメタファーとしてとらえたものである。

都を京都にする。 都が京都になる。

これらを表にまとめると表2のようになる。前述したように「移動の着点」は、人がプロトタイプであり、モノや場所はそれからの拡張である。また移動は具体的なものがプロトタイプであり、抽象的なもの、さらにメタファー的なものはそれからの拡張である。したがって表で左上の人への具体的移動を示す用法がプロトタイプであり、右または下に行くほど、拡張的用法である。

表2 移動の着点を表す二の用法

	人	モノ	場所
具体的移動	友だちに本をあげる。 社長に会う。	携帯にストラップをつける。 醤油がこぼれて服にしみがついた。	机の上に本を乗せる。 映画（を見）に行く。
抽象的移動	学生に日本語を教える。 母に甘える。	ゲームボーイにはまる。 政府は改革に取り組んでいる。	遠くアメリカに思いを馳せる。 ようやく日本に慣れてきた。
メタファー的移動	息子を一人前の大人にする。 息子が一人前の大人になる。	水を氷にする。 水が氷になる。	都を京都にする。 都が京都になる。

4-2-2 移動の起点

「移動の起点」用法はプロセス的で主観的な把握、すなわちプロセス的な事態をより主観的に把握した場合の二格の用法である。この場合二格は「源泉領域の能動的参加者」であり、ガ格に対して能動性を有していることから、有情物である人であることが多く、モノや場所での用法は考えにくくなる。能動性を持ち、移動の起点となりうるモノは、人間の力をしてはどうにもしがたい自然（の力）や強い加害性を持ったモノに限られる。

また、移動が変化へとメタファー的に拡張される用法は、着点用法では見られたが、この起点用法では見られない。以下の例文で は能動文、 は受動文である。

(2-a) 人からの具体的移動

人に対するモノや動力の具体的移動を表したものである。

友達に本をもらう。 岡田氏は犯人に殺された。

(2-b) 人からの抽象的移動（移動の抽象化）

人に対するモノや動力の移動が抽象化したものである。

先生に日本語を教わる。 彼は国民に愛されている。

(2-c) 人からのメタファー的移動（存在せず）

(2-d) モノからの具体的移動（起点のモノ化）

(2-a)では着点が入であったが、(2-d)はモノとなったものである。

銃弾に死す。 台風の家を飛ばされる。

(2-e) モノからの抽象的移動（移動の抽象化、起点のモノ化）

モノに対する移動が抽象化したものである。また ではモノの抽象化も起きている。

借金に苦しんでいる。 騒音に悩まされている。

(2-f) モノからのメタファー的移動（存在せず）

(2-g) 場所からの具体的移動（起点の場所化）

起点が場所となった具体的移動を示すものは存在しない。

(2-h) 場所からの抽象的移動（移動の抽象化、起点の場所化）

起点が場所となった抽象的移動も文例を見出すのが容易ではなく、以下の例文も場所名詞をモノ的に解釈し、「大都会」を「大都会の雰囲気」といった意味で解釈しないと非文となってしまう。

彼は大都会に染まっていた。

(2-i) 場所からのメタファー的移動（存在せず）

これらを表にまとめたのが表3である。表2同様「移動の起点」は、人がプロトタイプであり、モノや場所はそれからの拡張であると考えられる。また移動は具体的なものがプロトタイプであり、抽象的なものはそれからの拡張である。メタファー的移動の用法は起点用法には存在しない。従って表3で左上の人への具体的移動を示す用法がプロトタイプであり、右または下に行くほど、拡張的用法となる。

表3 移動の起点を表す二の用法

	人	モノ	場所
具体的移動	友だちに本をもらう。 岡田氏は犯人に殺された。	銃弾に死す。 台風の家を飛ばされる。	-
抽象的移動	先生に日本語を教わる。 彼は国民に愛されている。	借金に苦しんでいる。 騒音に悩まされている。	彼は大都会に染まっていった。
メタファー的移動	-	-	-

4-2-3 存在の位置関係

「存在の位置関係」の用法は、存在論的で客観的把握、すなわち存在論的な事態を客観的な把握によって言語化した場合の二格の用法である。

存在とは、ある空間(ドメイン)において、あるモノがある位置を占有していることである。存在の前提としての領域(ドメイン)のプロトタイプは3次元からなる実際の空間であることはいうまでもない。実在する空間における位置は普通、(3-a)のような「アル/イル文」で表される。

さらに空間から時間へのメタファー的拡張により、時間的位置(但し時間は空間とは異なり1次元的である)を示したものが(3-b)のような時間用法であろう。

また二格が空間的な位置を示す基準点(1m)となり、ガ格で表されたモノの位置は形容詞によって示される場合が(3-c)のような用法で、さらに(3-d)は空間的位置ではなく、強度を示す抽象的なドメイン上の位置を表す用法である。二格は強度のドメイン上の基準点(1m)として機能している。

以上の考察から、存在の位置関係を示す用法のプロトタイプは(3-a)のような用法であり、ここから(3-b)や(3-c)のような用法が拡張し、さらに(3-c)から(3-d)のような用法が拡張したと考えられる。

(3-a) 空間的位置

机の上に本がある/ない。

(3-b) 時間的位置(場所の時間へのメタファー的写像)

今日は10時に寝る。

(3-c) 空間的位置の1m(位置の1m化)

わが家は学校に近い。

(3-d) ある座標上の1m(位置の1m化、空間の抽象化)

この素材は熱に強い。

4-2-4 経験の主体

「経験の主体」の用法は、存在論的で主観的な把握、すなわち客観的にはプロセス的である事態が、主観的把握によってプロセス(動力連鎖)が背景化され、存在論的に把握された場合の用法である。前述したように「存在の位置関係」における存在のドメインは客観的に実在する空間ドメインであったが、「経験の主体」用法での存在のドメインは、認知主体が所有や知覚、能力、感情などをとらえるための主観的なドメインとなる。その意味で「経験の主体」用法は、存在論的な把握において、「存在の位置関係」の用法の拡張としてとらえられる。

(4-a)は(3-a)と同じ動詞「ある/いる」が用いられている。このことから、(4-a)は(3-a)からの拡張的用法と考えられる。(3-a)は客観的に実在する空間における存在を示しているが、この客観的な空間ドメインが主観化し、二格で表された人(所有者)の「所有ドメイン」における存在を示している。

(4-b)は空間ドメインの主観化がさらに進行し、「知覚ドメイン」における存在を示している。知覚ドメインにおけるプロトタイプはなんといっても「視覚ドメイン(簡単にいえば視界)」で、「私には富士山が見える。」とは私(認知主体)の視界に富士山が「ある」ことに他ならない。その他の知覚ドメインもドメインの抽象性は高まるもの同様に考えられる(例えば「視覚ドメイン」は視界と考えればかなり具体的であるが、「聴覚ドメイン」は「視覚ドメイン」に比べればかなり抽象的なものとなる)。

(4-c)になると、知覚ドメインはより抽象的な「能力のドメイン」に拡張する。知覚とは「見える」

「聞こえる」、「匂う」、「感じる」など人間が感覚をもって行う基本的な能力であるが、これがより広範な能力へと拡張されたものが(4-c)である。これも「弾ける」、「読める」などの様々な能力のドメインにおける存在としてとらえられたものと考えられる。

(4-d)は「感情のドメイン」における存在を示したもので、感情は知覚と共に人間の基本的な能力であることから、(4-b)同様、(4-a)から拡張したものであると思われる。

(4-a) 所有主(ドメインの主観化)

私に子供がある/いる。

(4-b) 知覚主(ドメインの主観化)

私には富士山が見える。

(4-c) 能力主(ドメインの主観化)

姉にバイオリンが弾ける。

(4-d) 感情主(ドメインの主観化)

私にはそのことがとてもうれしかった。

5. まとめ

本研究で考察してきた内容をまとめると以下のようなになる。またこれらを図3、表4にまとめた。

図3 格助詞二の意味構造

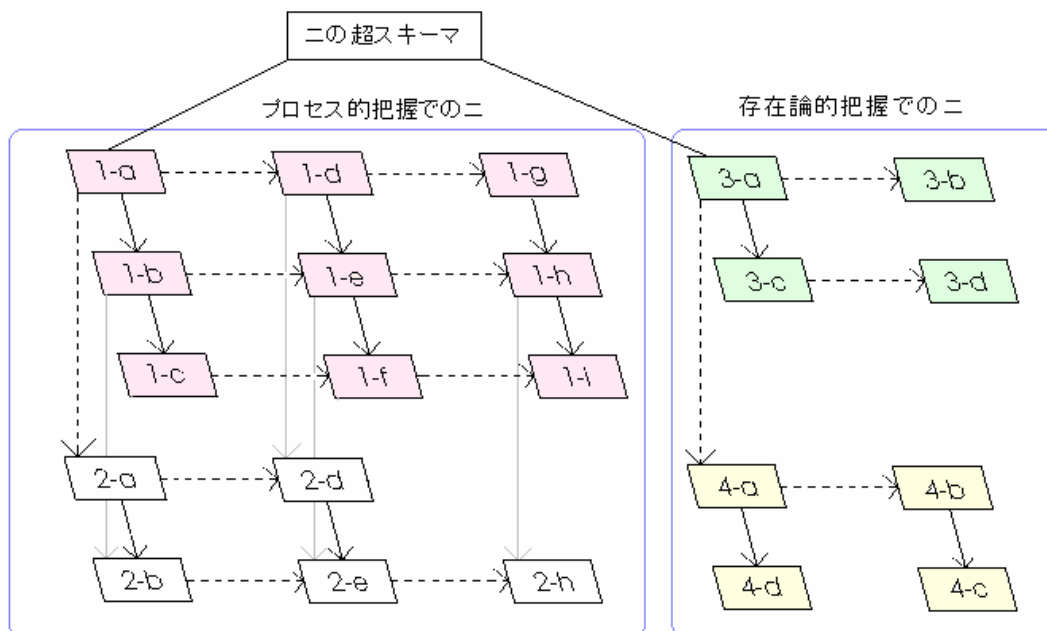


表4 二格の意味用法のまとめ

	把握の主観性	把握のしかた	ガ格に対する二格の特徴
移動の着点	客観的把握	プロセス的(動的)	対峙性 着点性
移動の起点	主観的把握	プロセス的(動的)	対峙性 起点性
存在の位置関係	客観的把握	存在論的(静的)	対峙性(着点性)
経験の主体	主観的把握	存在論的(静的)	対峙性(起点性)

認知主体である人間は、外界を認知するにあたって、事態を動的なプロセスとして把握するか(プロセス的把握) または静的な存在として把握するか(存在論的把握)のいずれかを選択している。プロセス的把握用法、存在論的把握用法の双方は、認知主体の見え(perspective)との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「移動の起点」、「経験の主体」の用法は、それぞれ「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法に比べ、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」となっている。

プロセス的把握では、客観的把握による「移動の着点」用法がプロトタイプで、主観的把握による「移動の起点」用法が拡張的用法である。両用法は、図3のように、よりプロトタイプ的な用法が

ら周辺の用法へ放射状カテゴリー構造を構成する。プロセス的把握用法の二格はガ格に対し「動的な対峙性」を共有している。

存在論的把握の用法では、客観的把握による「存在の位置関係」用法がプロトタイプで、主観的把握による「経験の主体」用法が拡張的用法である。両用法は、図3のようによりプロトタイプの用法から周辺の用法へ放射状カテゴリー構造を構成する。存在論的把握用法の二格はガ格に対し「静的な対峙性」を共有している。

日本語の場合、「プロセス的把握用法」と「存在論的把握用法」とは同じ格標識「ニ」で表されていることから、両者は何らかの超スキーマを共有し、一つのカテゴリーとしてまとまっていると考えられる。その超スキーマとは表4から明らかのように「ガ格に対する対峙性」であると考えられる。

本稿は、二の様々な意味を、2通りの認知主体の把握の仕方（「把握のプロセス性」や「把握の主観性」）及び二格のガ格に対する関係によって整理したものである。二格が着点・起点といった動的な用法と、単なる存在という静的な用法がある理由や、着点的な用法と起点的な用法とがある理由は、認知と言語との関係、すなわち人間の把握の仕方がどのように言語化されるのかといった点からうまく説明することができる²。また二が様々な意味用法を持ちつつも、一つの形式で表されることも、二格がガ格に対し「対峙性」という共通の特徴を共有していることで説明できる。

<注>

- 1 後述するが、このような把握の仕方は事態に対し「プロセス的把握」をした場合である。
- 2 ガ格の意味・用法もまた、本稿で扱った二格同様、人間が行う2通りの把握のしかたの双方にまたがっていると考えられる（森山 2004a）。菅井（2002）では事態を言語化する際に用いられる構文スキーマとして「過程的構文（processual construction）」と「存在論的構文（ontological construction）」という2通りの構文スキーマが用いられるとしており、本稿もこの立場を基本的に踏襲している。

<参考文献>

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and form*. London: Longman.
- 堀川智也（1988）「格助詞「ニ」の意味についての一考察」『東京大学言語学論集'88』：321-333.
- 池上嘉彦（2000）『日本語論への招待』東京：講談社.
- 国広哲弥（1986）「意味論入門」『言語』15-12：194-202.
- Langacker, Ronald. W. (1991a) *Foundations of cognitive grammar*. Vol.2. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. (1991b) *Concept, image, and symbol. The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.
- 森山新（2001a）「認知的観点から見たヲ格と二格の意味・用法の違い」『日本語教育研究』4：19-28. 高麗大学学校教育大学院日本語教育研究会.
- 森山新（2001b）「認知的観点から見た格助詞ヲ、二の意味のネットワーク」『日本語教育研究』2：9-56. 韓国日本語教育学会.
- 森山新（2003）「認知的観点から見た格助詞二の意味構造」『Foreign Language Education』10-1：229-243. 韓国外国語教育学会.
- 森山新（2004a）「格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』57：51-66.
- 森山新（2004b）「認知主体の把握の仕方と格助詞二の多義構造について：認知言語学的観点か」『日本学報』59：89-102.
- 西村義樹（2000）「対照研究への認知言語学的アプローチ」坂原茂編『認知言語学の発展』145-166. 東京：ひつじ書房.
- 菅井三実（2000）「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻第2分冊：13-24.
- 菅井三実（2001）「現代日本語の「二格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻第2分冊：13-23.
- 菅井三実（2002）「構文スキーマによる格助詞「が」の分析と基本文型の放射状範疇化」『世界の日本語教育』12：175-191.
- 杉村泰（2002）「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1：39-55. 名大言語文化部・国際言語文化研究科.

* 本研究は平成 14-16 年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)(2) (研究代表者 森山新、課題番号 14510615) による。

< abstract >

The Semantic Structure of Japanese Case Particle NI
: Cognitive Linguistic Perspective

MORIYAMA, Shin
Ochanomizu University

This research depicts various meanings of a Japanese case particle NI. It can be summarized as follows.

- (1) In recognizing the external world, human beings as a cognizer choose one of two types of perceptions: “processual perception” or “ontological perception”. The former perceives an event as a dynamic process, and the latter perceives an event as a static existence.
- (2) “Processual perception” and “ontological perception” have two types of perception: “objective perception” and “subjective perception”. The former does not have a deep relation with the cognizer's perspective, and the latter is deeply reflected within the cognizer's perspective. The usage of “origin of movement” is more deeply reflected by the cognizer's perspective than the usage of “goal of movement”. Also, the usage of “experiencer” than the usage of “spatial relations among entities”.
- (3) In the processual perception, “goal of movement” by objective perspective is prototypical usage, and “origin of movement” by subjective perspective is extended usage. Two usages form the radial categorical structure centering on the prototypical usage. Usages of NI as processual perception shares “dynamic nature of confrontation” to the object marked by GA.
- (4) In the usage of ontological perception, “spatial relationship among entities” by objective perspective is prototypical usage, and “subject of experience” by subjective perspective is extended usage. Two usages form the radial categorical structure centering of the prototypical usage. Usages of NI as an ontological perception shares “static nature of confrontation” in relation to the object marked by GA.
- (5) Since the usages of “processual perception” and “ontological perception” are expressed with the same case marker “NI” in Japanese, both share a certain super-schema and are considered to be collected as one category. It is thought that this super-schema is “the nature of confrontation to the object marked by GA”.